大学生のキャンパス内居場所 1

自意識・一人享楽と回復環境

○畑 倫子¹・山崎幸子¹・上村佳世子¹

(¹文京学院大学 人間学部 心理学科)

キーワード：大学キャンパス，回復環境，自意識

How students spend time in the university campus 1

Tomoko Doi HATA¹, Sachiko YAMAZAKI¹, Kayoko UEMURA¹

(¹Department of Psychology, Bunkyo Gakuin University)

Key Words: university campus, restorative environment, self-consciousness

目 的

現代の大学生世代は、他者からの評価や視線を気にする傾向があるため、特に雑談や食事などの対人場面にストレスを感じやすいと言われている(岡田, 2016 など)。こうした学生が継続した学生生活を送るためには、大学キャンパス内に安心して過ごすことのできる場所やストレス状態から回復できる場所(回復環境; Hartig, 2004 など)を整えることが重要であろう。昨年度の調査からは、1つの学科だけではなく、学部全体を対象とし、他者からの視線を加味する必要性が示唆されたため、対象学科を増やし、自意識や一人でいられることと回復環境との関連についての分析を行なった。

方 法

協力者：首都圏 A 大学 B キャンパス C 学部の授業中に質問紙を配布し、335 名(1 年生 182 名, 2 年生 94 名, 3 年生 36 名, 4 年生 13 名, 不明 10 名; 男性 93 名, 女性 231 名, 不明 11 名)の協力を得た。C 学部には 4 つの学科があり、社会学科 32 名, 心理学科 70 名, 児童発達学科 164 名, 福祉学科 56 名, その他と不明が 12 名であった。質問紙の構成: 1. 自意識尺度(菅原, 1984) 21 項目, 2. 一人でいること尺度(和田, 2017) 17 項目, 3. 日本語版 Ten Item Personality Inventory(小塩・阿部・ピノ, 2012) 10 項目, 4. PRS(Perceived Restorativeness Scale) 日本語版(芝田・畑・三輪, 2008)を Pasini, Berto, Brondino, Hall, & Ortner (2014)の短縮版を参考に、各特性 2 項目ずつの 10 項目, 5. キャンパス内で疲れた時や嫌なことがあったときに最も行く場所 1 か所。尺度に関しては全て 6 件法に揃え、場所については自由記述で回答を求めた。本稿では、自意識尺度と一人でいること尺度に欠損値がない 288 名について分析を行った。

結 果 と 考 察

自意識尺度については、他者から見られた自己へと注意を向ける傾向である公的自意識(以下、公的)と自己の内面や感情へ注意を向ける傾向である私的自意識(以下、私的)の 2 つの因子の得点を算出したところ、公的の平均値は 3.89($SD=0.85$)、私的の平均値は 3.97($SD=0.82$)であった。一人でいること尺度については、一人を楽しめる一人享楽(以下、一人)と友人とつながりたい友人つながり(以下、友人)の 2 つの因子の得点を算出したところ、一人の平均値は 4.07($SD=0.80$)、友人の平均値は 4.35($SD=0.91$)であった。公的と私的の相関は $r=0.52$ 、一人と友人の相関は $r=0.04$ であった。公的、私的、一人、友人の 4 つの平均値でウォード法ユークリッド距離の平方を用いたクラスター分析を行い、デンドログラムから 5 つのクラスターに分けた。5 つのクラスターの公的、私的、一人、友人の平均値は表 1 の通りである。平均値と 6 件法の中心(3.5)からの差を算出したところ、クラスター 3($n=139$)が最も平均値からの差が少なかったが友人が低めであった。クラスター 1($n=44$)は私的と一人が高く、クラスター 2($n=29$)は公的が高く一人が低い群であった。クラス

ター 4($n=60$)は友人が高い群で、クラスター 5($n=16$)は一人が高い群であった。クラスターと性別で χ^2 検定を行った結果、有意な差が見られ($\chi^2(4)=17.58, p=0.00$, Cramer's $V=0.25$)、残差分析の結果、クラスター 4 が女性が多く、男性が少なかった。クラスターと学科で χ^2 検定を行った結果、有意な差が見られ($\chi^2(12)=21.15, p=0.05$, Cramer's $V=0.16$)、残差分析の結果、クラスター 1 は社会学科が多く、児童発達学科が少なかった。クラスター 4 は児童発達学科が多く、心理学科が少なかった。クラスター間でパーソナリティ 5 因子に差が見られるかどうか分散分析を行ったところ、外向性($F(4, 266)=6.39, p=0.00, \eta^2=0.09$)、協調性($F(4, 266)=2.62, p=0.04, \eta^2=0.04$)、神経症傾向($F(4, 266)=4.71, p=0.00, \eta^2=0.07$)、開放性($F(4, 266)=3.50, p=0.01, \eta^2=0.05$)に有意な差が見られ、クラスター 1 は開放性が高め、クラスター 2 は神経症傾向が高い、クラスター 3 は外向性、協調性、開放性が低め、クラスター 4 は外向性と協調性が高めであった。キャンパス内に回復環境がない人を除いて、クラスター間で回復環境で感じている回復的特性に差が見られるかどうか分散分析を行ったところ、まとまり($F(4, 221)=3.12, p=0.02, \eta^2=0.05$)と広がり($F(4, 221)=3.12, p=0.02, \eta^2=0.05$)に有意な差が見られた。

表 1: 5 つのクラスターの公的、私的、一人、友人の平均値()内は SD, C=クラスター

	C1	C2	C3	C4	C5
公的	3.93 (1.01)	5.01 (0.49)	3.88 (0.64)	3.80 (0.50)	2.17 (0.55)
私的	4.92 (0.56)	4.77 (0.53)	3.79 (0.56)	3.73 (0.53)	2.39 (0.48)
一人	5.13 (0.39)	3.38 (0.75)	3.78 (0.59)	4.09 (0.61)	4.76 (0.78)
友人	4.64 (0.92)	4.79 (0.59)	3.72 (0.62)	5.33 (0.40)	4.51 (0.75)

クラスターを表頭、キャンパス内で疲れた時や嫌なことがあったときに最も行く場所を表頭とした生起頻度の行列を作り、対応分析を行い、サブジェクト項目とカテゴリ項目を同時に表示した 2 次元布置図(図 1)を作成した。公的高く神経症傾向も高いクラスター 2 の場合、回復環境は保健室であることが多く、他者からの評価や視線が気になって一人で過ごすことができないと保健室が利用される傾向があるようだ。友人とのつながりは少ないものの他は平均的なクラスター 3 は図書館やトイレを利用するようだ。

図1: クラスターと回復環境での対応分析結果